
とある科学の能力記憶

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の能力記憶

【Nコード】

N8162Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

一步通行が2か月前出会ったのはとある実験によりボロボロにされたレベル4の少女、小鳥遊双葉だった。何故か双葉は義理の妹として部屋に居候（ただ金はちゃんと払ってる）することに。一方通行がお兄ちゃんというとてもない設定ですが、なんか書いてると楽しい。凄く楽しい。読んでると楽しいのかもしれない。そんな小説です。あと作者は義理妹とか妹とか妹設定が好き。とある魔術の禁書目録SS。

第一話 一方通行と妹——なんでこいつはこんな扱いにくいんだ？

現在、巷はドキドキワクワクの寝ても怒られない5月のビックイベント、GWの真っ最中である。

しかしそんなことは、一方通行にとってどうでも良いことだった。今は、それより。

有り得ない、いつも朝に一方通行は恒例行事の様に思う。

のそりとソファの上で体を起こした彼は、台所の方へと目を向けた。

そこでは、可愛らしい少女が朝ごはんを作っていた。

「……有り得ねエ」

「あ、お兄ちゃん起きた？」

一方通行が起きたのに気づくと、少女は嬉しそうにこちらへ駆け寄ってきた。

「朝ごはんもうすぐできるからね。ちょっとまってね」

一方通行の脇にたたんでおいた服を置き、もう一度ぱたと台所で駆け回る少女。

少女の名前は小鳥遊^{たかなしふたは}双葉。中学——正確に言うならば常盤台中学の2年生である。

そして、かなり優秀なレベル4の一人、なのだが——

「有り得ねエ」

一方通行はもう一度呟いてソファに——台所の様子が目に入らな

いように反対側をむいて——もう一度横たわった。

あの様子を見てみると、ただの女の子ではないか。

その様子を目ざとく見つけた双葉は「こらー！お兄ちゃん、早く起きないと健康に悪いよ？おひさまだよ？日がルンルンだよ？」と訳の分からないことを口走る。

「うるせエ」

「お兄ちゃん、朝ごはん天ぷらがいい？ハンバーグがいい？」

「朝から重たすぎだ」

阿保かこいつは、と一方通行は半眼になりながらもそのそと起き上がり、冷蔵庫からコーヒーを出して口に含んだ。

双葉はほえーと間抜けな声をだして「ブラックとはお兄ちゃん凄いなー」と感心している。そんな彼女は砂糖と牛乳をいくらいれても苦い苦いとコーヒーが一切飲めなかったりする。

こんな生活もこれで2ヶ月目に入った、と一方通行はうんざりした。

「オマエ、出ていこうとは思わねエの？」

「全然」

屈託の無い笑みで答えられてしまった。一方通行はわずかに黙り、そして

「殺すぞ」

「んー、いいよ？出来るものなら」

「……」

その挑発に、一方通行は双葉の体に触れようとした。が、出来ない。

「……チッ」

「うん、お兄ちゃんは優しいもんね」

「……飯係が居なくなると思い直したただけだ」

双葉は笑って一方通行にお皿を渡した。その上には先ほどいつていたハンバーグや天ぷらから、なぜか肉饅まで載っていた。

「……オマエ、ちょっとはバランス取りやがれ。なんで洋・中・和の三点セットなんですかア？おかしいんじゃない？」

「えー、なんか冷蔵庫に残ってたのそれしかなかったんだもん。しようがないよ」

「朝からマジ重いなアテメエの作る料理は」

一方通行は文句を言いながらもテーブルできちんと最後まで食べた。その様子に、双葉はニコニコと笑って

「お兄ちゃんはいねえ」

「……殴ンぞ」

双葉は一方通行の暴言には一切動じず、お皿を台所へ持っていて洗ってしまった。

どうもこいつはやりにくい。

一方通行は着替えを済ませるとドアの方へのっそりと歩きだした。

「あれ？お兄ちゃん外出？双葉も行こうかな」

「くんな」

「ん。分かった」

なんでこんなときだけ聞き分けがいいんだよ、と一方通行は突っ

込みたくなつた。

扱いにくい。それに、妙に素直。

それが一方通行がはじき出した、小鳥遊双葉への人柄だった。

「お兄ちゃん、無駄な喧嘩はよしてね」

「……うるせエ」

「そういうときのお兄ちゃんはよく聞くもんね。じゃあ、いつてらっしやい」

「……あア」

ムスつとした顔の一方通行が出ていくと、双葉はエプロンを外し、短パンに半袖というラフな格好になる。それから、することもないので部屋のお掃除をすることにした。それが終わったら少なくともってきた食料の買出しに行こうと頭の中で予定を組み立てる。

小鳥遊双葉。まだ中学生だが今すぐにでもお嫁に行ける家事能力を身に付けていたりする。

一方通行はまだ朝になつたばかりの街をぶらぶらと歩いていた。

別に目的があつたわけではないが、しかしあの家にいるよりは外に出たほうが楽だという理由だった。

あの小鳥遊双葉という少女は、2ヶ月ちょっと前の2月後半に出会った。

何故だか一方通行になつてきて、部屋の前まで付いてきた拳句家から締め出すと朝起きたら玄関の前で寝ていた。マンションから放り出しても朝起きれば必ず玄関前にいる。完全な不審者だった。

もしこの場合、一方通行が女で、双葉が男であつたら捕まってい

たのは双葉のほうであろう。が、生憎と一方通行は男だったし、双葉は——しかも可愛らしい——女の子だったので、ご近所さんからの目が痛い痛い。普段はそんなことを気にならない彼だが、連日色んな人に「君、あの子放っておくつもりかい?」「知り合いなんだろう? 助けてやりなよ」と言われ続け、腹が立つたので家にあげさせた。次に、双葉は『金を払うからここにすませてくれ』と頼んできた。断った。次の日には法律上義理妹になっていた。なぜだ。

でもまあ家事をやってくれるし便利ではあるので一応今は追い払うことをしなくなった。毎日朝から作る重い料理はかなり迷惑だが。

「チツ……」

舌打ちをする。それでどうにかなるわけではなかったが、取り敢えず気晴らしだ。

そこらへんを彷徨っている不良にでも奇々をぶつけるか、と思っただが出てきたときに『無駄な喧嘩はしない』と約束してきてしまったので何となくやりづらい。

一方通行はやはりそれにも奇々して目の前に置いてあったバイクを蹴り飛ばした。バイクは一瞬にして鉄塊に成り果てる。

一度双葉を殺してやったほうがいいかもな、と彼が物騒なことを考えていると——

「あー」「オイオイ兄ちゃんなにしてくれちゃってんですかー?」「オレらの大事なバイクが台無しじゃねえか」「金払えよ」「ヒヤッヒヤッヒヤッ」

「取り敢えず殺そうぜ」「いいないいな」「てことで兄ちゃん手合わせ願いますよ」「ヒヤッヒヤッ」

後ろから、低俗な声かけられた。

彼はめんどくさそうに一度舌打ちし——いいチャンスだとばかり

後ろを向いた。

そこには、がらの悪い大学生風の男達が数人。

——喧嘩を売られたンだからしょうがねエよな。

そう勝手な理屈を付け、苛々をぶつける対象を見つけた彼は、獰猛に笑った。

「じゃ、こちらこそヨロシク頼みますよオ——三下」

数分後、その場には地獄絵図が展開されることになる。

兄がそんな憂さ晴らしをしているとは露ほど知らず、双葉は掃除を終え常盤台の制服に着替えた。

外出時には常盤台の制服を着るよんという規則を真面目な彼女はきちんと守っていたりする。

彼女はるるんと上機嫌で鞆を持ち、部屋から出た。

革靴の足音が、カツカツとテンポ良く、踊るように打ち出される。

1時間程で不良たちの組織は壊滅した。

どうやら一方通行が喧嘩を売られた（と思っているのは彼だけであり、傍から見れば普通に彼が喧嘩を売っている）不良たちは結構大きい組織の一員——スキルアウト——だったらしく、仲間の敵討ちか何だか知らないが一方通行に大量の喧嘩をふっかけてきた。

これ幸いと一方通行も喧嘩を買う。おかげで、かなりの苛々がこ

の1時間で解消された。

スキルアウトに感謝するなんて考えもしなかったぜ、と一方通行は小さく奥の方でクツクと笑った。

と――

「へー、君結構可愛いね」「おいまだ昼だぜ」

「お兄さんと一緒に遊ばない?」「何時になるんだよ」

おや、まだ残党が残っていたのか、と路地裏で不良たちがたむろっている所へ一方通行が覗いてみると――

――双葉がいた。

「……チッ」

不良に囲まれた双葉は別に怯えてはないものの、戸惑っている。彼女はレベル4だ。見るところあの不良たちの能力はさして高そうにも見えず、同じレベル4でも、双葉にかなう相手など一人もいないはずだ。

レベル4の中でのトップ。それが小鳥遊双葉なのだから。

で、なぜ彼女が戸惑っているかというと、それは彼女の優しさからくる。

能力を使えば一発なのだが、それを使っているか分からない――というか、使ったことにより怪我をさせるのが申し訳ないらしい。どうせ後で治してやるんだからいいんじゃないかねえか、と一方通行が呆れたほどだ。

ついでに、双葉を取り囲んでいる不良たちは双葉が戸惑っているのを力が弱い、または攻撃系の能力ではないため反撃できない――つまり、ただの女の子と変わらないと思っっているらしく、見るからに鼻の下を伸ばしていた。

「ねえ、君何年生？」「それ常盤台だよね？」

「中坊にしちゃ中々悪くない顔立ちだな」「俺好み」

そんな気持ちの悪い言葉が風に乗って聞こえ、一方通行は顔をしかめた。

そして、双葉をさつさと連れて帰ろうと彼が足を踏み出そうとした瞬間。

「ご、ごめんなさい」

その瞬間、双葉を取り囲んでいた不良達がボワツと仰け反った。小範囲の爆風でも起こしたのかもしれない。

「なつ、てんめ…っ」「オイ、こいつやるぞ！」

「皆でかかれば大丈夫だ」「何といてもただの女だしな」

双葉は眉を下げた。それにより、不良たちはさらに興奮する。大方、双葉が自信を無くした、とも思っただのだろう。自分たちならばこの少女を簡単に潰せるとまで思っただのかもしれない。
が、違う。

双葉は、やはり相手が怪我をすることを、申し訳なさがっていた。

「あの、怪我したくないなら……どっかへ行った方がいいと思いますけど」

双葉の忠告に「なんだろうゴルァ！」と不良たちが色めき立った。双葉には申し訳ないが当たり前である。

「えと、じゃあ、んー……ここ、ものが多いんですね」

双葉のつぶやきに、不良たちは「はあ？」という顔をした。
そして、双葉は言う。

「なので、物でもぶつけて昏倒させて頂きます」

その瞬間、不良たちの頭上には大量のボールやゴミ箱、何故か車の扉部分などが現れ、そして落ちた。

勿論、双葉は一步たりとも動いていない。

ドガバキヤグキ、と嫌な音がしてそれらが男たちと共に地面へと伏した。

「……んー、路地裏、今度から使うのやめよう」
「当たり前だろ、ンなモン」

双葉が男たちの怪我を治そうとしゃがみこんだのと、一方通行が双葉の方へ歩きだしたのはほぼ同時だった。

双葉はえ？え？と困惑した顔を浮かべた後、

「お兄ちゃん！？なんでここに！？」

「たまたま見てた」

「えー、なら助けてよー」

助けなくても自分でも対処出来るだろうが、と一方通行が吐き捨てる、それとこれとは違うのー！と反論された。意味が分からない。

双葉はきよろきよろと不良たちを見渡し、主だった怪我をしているものの傍に駆け寄って、その怪我に手を触れた。その瞬間、その怪我は消える。

「……」 スキル・メモリー
「能力記憶」 ねエ……」

一方通行は独りごちた。

爆風を巻き起こしたのは『風使い』^{エアロ・シューター}の能力。

男たちの上に物体を表したのは『座標移動』^{アップポイント}の能力。

そして現在怪我を治しているのは『肉体再生』^{オート・リパース}の能力。

双葉が持っている能力は”多才能力”^{マルチスキル}ではない。むしろそれを逆手にとったような能力である。

『スキル・メモリー』。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能力。『能力記憶』。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能力。

つまり、言い換えるならば”多才能力を作るための能力”とでも言うべきか。

滝壺とは根本が似ているものの、実際にはかなり遠い。

つまり双葉が持っているのは、”他人の能力をコピーする能力”なのだから。

反則技とも言える能力である。一人で学園都市全員の能力者——勿論レベル5の力は再現できないが——を演じて見せることだって不可能ではないはずだ。

だからこそ、彼女は『レベル5候補生育成プログラム』^{レベルアップ}の一人に抜擢され、一番優秀な成績を収めたのだろうから。

が、今のところそういうのはどうでもいい、と一方通行は思っている。

だから、今は。

「オイ、帰ンぞ」

「あつはーい！」

双葉はぱたぱたと一方通行の方へと駆け寄ってきた。一方通行はそれを待たず、さき先行っていしまうが、双葉はその

距離を空間移動で詰めた。

二人は、仲良く——結構一方的に——家路へと帰ることになった。

第一話 一方通行と妹——なんでこいつはこんな扱いにくいんだ？（後書き）

感想評価、頂けたら嬉しいです！ちょっと滝壺のどこ曖昧かも……ご指摘頂けたら嬉しいです！

第二話 夜中のたわいのない事件——お兄ちゃんって優しいんだなあ！。(前書

2話、ちゃんと全部書きました！

第二話 夜中のたわいのない事件——お兄ちゃんって優しいんだなあ！。

双葉は一方通行の上に毛布をかけようとしたが、その毛布が跳ね返されてしまった。

現在は夜である。GWの最終日。双葉がいつものように——今回はたまたま義理兄が見ていたが——不良を倒した日から2日後。

一方通行は毛布もかけずソファでさっさと寝てしまったので、風邪を引いてはいけないと思った双葉は毛布をかけようとした、ら跳ね返されて今の状態にある。

毛布が飛んできた急いで若干ジンジンと痛む指先を抑えつつ、双葉はいつものように能力を使った。

「右手、エレクトロマスター発電能力、左手、バイロキネシス発火能力」

双葉が呟くと、右手には電気がまとわりつき、左手の掌の上には小さな炎が浮かび上がった。

成功、と双葉は嬉しそうに笑う。

これは毎日の日課。一方通行が寝た後に行う自主トレだ。

一度に複数の能力を発動するのを鍛えるための特訓。

「体表にはオフエンスアーマー室素装甲を展開」

もう一度呟き、また新たな能力を発動させる。

そして左右の（能力が発動したままで）手を自分の体に押し当てた。

「……よし」

かなり危険とも言える行為だったが、双葉には一切の傷がない。当たり前だ、窒素装甲で体を守っているのだから。

以前アイテムという暗部のグループのメンバーの一人と戦った時に得た能力で、双葉は結構重宝していた。発動優先順位がかなり高い能力である。

双葉は能力が”多過ぎる”ため、その中を自分で”決めて”、”発動”するのが苦手だ。なので、いつも”その時の状況に一番対処出来るもの”を条件反射で選ぶようになっていく。が、それとは別に発動優先順位——つまりは突発的な状況で発動する能力のを何個か決めていて、”窒素装甲”はその一つ、ということだ。

双葉は一旦発動させた3つの能力を解き、ふーっと息をはいた。同時に発動するのはかなり疲れるのだ。三人がやる計算を一気に一人でやってしまうようなものである。だからこそ、基本的には順番に発動するのしかやらないのだが。これを克服しないとレベル5になれないだろう、と研究社に言われた。

ま、順番にやるのはレベル4の能力者を順番に対処するみたいなモンだからなー、と双葉も納得した。

水を飲み、一息するともう一度双葉は能力を発動させようか。——と、彼女は思う。

もしかして、いやずっと思つてて、やっぱりやめてたけどお兄ちゃん頭の頭の中を読んでみようか。

いやいや、やめなさい、と彼女の自制心がそれを止める。いやでも気になるー！と好奇心旺盛な部分が反論し「うわあああああ——！！」なんか叫んだ。

その瞬間、高速で物が飛んできた。

「うるせエ」

「ごつごめんなさいっ！あ、あとあんまり置時計は投げないほうがいいと思う！」

双葉は投げられてきた置時計をなんなくキャッチし、コトンとテーブルに置いた。一方通行はチツと舌打ちする。

「だいたいなんだア？夜に練習とかイイ子ぶってテメエは褒められたい優等生のつもりかよ」

「そういうわけじゃないけど……なんとなく、無意識っていうか。やらなきゃいけないみたいな？なんでだろうね。でも、お兄ちゃん五月蠅いなら音を反射すればいいんじゃない……」

「チツ、チカチカ光ったり風の向きが急に変わったり——オレだからこそ苛々するんだよ」

確かにそうかもしれない、と双葉は思った。彼は方向ベクトルを操る能力者だ。ずっとベクトルが変わり続けたらうざいのもしれなかった。んー、と双葉は唸り、

「じゃあ外にいつてれんしゅ」テメエには黙って寝るっていう選択肢はねエのかよ」

双葉は眉を下げた。

でも、多分今出ていったら間違いなくこの義理兄は怒るので、おとなしく彼のソファの下——つまり地べた——に横たわった。

一方通行はもう一度だけ舌打ちすると、今度は本当に眠りに落ちてしまった。

一方通行ははた、と気がついた。
そして体を起こす。窓を見ると、まだ今は夜中だった。
そう、人が絶対に出ていけない時間。なのに。
怪訝そうに彼は呟いた。

「……あの糞ガキはどこに行った……？」

あの少女は自分が言ったことを破ったことはないし、聞き分けはいい方だというのに。

双葉の気配はこの家のどこにも見当たらなかった。彼の寝ていたソファの横にも、台所にも。

「……チッ」

一方通行は忌忌しげに舌打ちすると、無造作に靴を履き部屋を飛び出した。

双葉は彼のソファの横で目を覚ました。

ぱふ、と毛布の音をはためかせ、双葉はよいしょと起き上がる。

朝日が眩しい。もう朝だ。

いつもどおり着替え、そして支度をする。彼と自分の朝ごはんを作るために。

そこで、「あれえ……？」双葉は気づいた。

一方通行がソファから居なくなっていた。

「何でだろ……コーヒーでも買いに行つたのかなあ」

首を傾げつつも鳥肉をフライパンの上で裏返した。今日はフレンチっぽいものを作るらしい。やはり朝から重たいものを作る少女だった。

その後もテキパキと朝ごはんを作り終え、エプロンを外した双葉はんー、と唸る。

ご飯が出来上がったというのに、一方通行はまだ帰ってこない。コンビニだったら結構早くに帰れるのにねえ……と双葉が思っている――

――バーン！という音がしてドアが破れた。

「あ、お兄ちゃん！」

双葉は一瞬でその犯人を看破する。それは自身の義理兄だった。その義理兄は少し息を詰まらせ――それからズンズンと双葉の方へ向かってくる。

「どこ行つてたのお兄ちゃん、もうご飯できた――ツツツ！」

「テ、メ、エ、こ、そ、ど、こ、行、つ、て、た、ン、だ、ク、ソ、ガ、キ」

バシコーン！と頭をチョップされた。

うえ！？と双葉は目を白黒させた。

「なっ何かなお兄ちゃん！？す、凄く痛いんだけど！？うつう、なんでそんな怖い顔で連続チョップなのー！？」

「はア！？テメエが夜中にどっか行くからこっちは探しに行つてやつたつてのによオ！何が”何かな”だ！」

「え？それだとお兄ちゃん私を心配したってこと？」

「は、ア！？違エよ！テメエの思考回路はどうなってやがる！つか話逸らすンじゃねエ！」

話を逸らす、と言われても。と双葉はチョップされつつ首をかしげる。

「だって、お兄ちゃんの言ってることが良くわからないんだもん」

「……はア？テメエが夜中に歩いたせいで——」

「だから、私昨日の夜に外に歩いてなんかいないよ？」

「……、」

一方通行は目を開いて驚いた。

チョップが止まった隙にちよつとだけ双葉は一方通行から距離をとりじんじん痛む頭を両手でおさえた。

「……夜中に、出て行ってない、だと？」

「うん」

双葉が嘘をついていないことは分かったらしい一方通行はそのあときちんと朝ごはんを食べ、また寝てしまった。

その寝顔を見ながら双葉は学校へ行く準備をする。

お兄ちゃん優しいところもあるんだなあー、とちよつぴりにやにやしなから。

「じゃ、お兄ちゃん行ってきます」

声は帰ってこなかったが、双葉は何故か満足だった。
常盤台への道は、いつもよりかなり明るく感じられた。

双葉の常盤台での友達はずっと一人しかない。

そういうとかなり寂しい人間に見えるが、意外とそうでもなかったりする。

理由は、双葉は一人なのを寂しいと思わないことと、その一人が親友であり、他には誰も必要ないということだ。

「美琴」

「あ、双葉」

学校の門で双葉はその親友——美琴にあった。

御坂美琴。兄と同じレベル5の超能力者。双葉にとってそれは憧れの存在というよりただの同種——または同族好意——なのだが、そういうのを一切関係なく、美琴の人格が双葉は好きだった。

「今日ね、お兄ちゃんがちゃんと朝から起きてくれたんだよ」

「へえ、よかったじゃない」

美琴は双葉に義理の兄がいるのを知っているが、それが誰かは知らない。

双葉も教えないわけではなく聞かれないから答えない。

それに、普通友達の兄が凄い人だなんて想像は巡らせない。

「そういえば、白井さんは？」

「黒子？黒子ならさつき風紀委員の人に連れて行かれたけど……なんか事件があったみたい」

「ふうん……？」

双葉と美琴は日常会話を交わしながら教室へと入っていく。
と、その途中で――

「何よ、あたしが先にこの子を勧誘したんじゃないっ！」

「え。えと、その……」

「ふふ、とった者勝ちでしょう、普通は」

「とっ！？あ、え……？？」

「なんですって！？」

喧騒が聞こえた。

廊下のだ真ん中でなにやらしい争いをしているらしい。

「……多分、聞く限り派閥争いだよね」

「どいつもこいつも。好きねえ」

美琴と双葉は顔を見合わせて嘆息した。そして、美琴は「はいはい」と間へ割り込む。

「とりあえず、道の邪魔になってるから、やめたほうがいいわよ」

「……あなた、御坂さんじゃありませんの」

「みつ御坂さん！？」

二人の上級生らしき人物は、美琴の姿を捉えると二者二様の反応を示した。

ついでに、その間に挟まれていた下級生っぽい女の子は、双葉の方へ逃げてきた。ほう、と溜息をつく。

「災難だったねー」

双葉が声をかけると、「はう!？」と素っ頓狂な声を上げてビビらせてしまった。何故だ。

その間も、美琴が場を収めている。

彼女はこういうのに長けているから、まかせても大丈夫だろう。それより。

「どうして、派閥なんかに入ろうとしたのかな？」

双葉はにっこりと笑ってその子に話しかけた。その子はビクビクしながら

「強引に勧誘されて……」と答える。

ふうん、と双葉は心の中で思う。読心能力を使ったところ嘘をついているわけでもない。

これは潰し決定かな、と双葉は美琴に^{テレパシー}通心をした。美琴の心を読み取ると”おっけ、分かった”と返ってきた。

「そっか、怖かったね。もう大丈夫だよ」

「えっ？」

その子の疑問には答えず、美琴の方へ歩き出すと、美琴の方はその場は一時収まったらしい。二人の上級生らしき人物はそれぞれの教室へ出ていってしまった。

「美琴、お疲れ」

「あーあ、めんどくさいったら」

双葉は美琴の頭を「美琴はえらいねえ」とわしゃわしゃと撫でまわした。「ちよっやめなさい」と美琴から非難の声があがるが気に

しない。ついでにそれをうらやましそうに眺めるほかの生徒の視線も気にしない。

と、そこでチャームがなった。

「あ、授業だね」

双葉は名残おしそうに美琴の頭から手を放した。

美琴の髪の毛はさらさらなので触っていると気持ちいいのである。

「じゃあ行きましょうか」

美琴の提案に、うん、と双葉は頷き、後を追う。

周りに散っていた野次馬も二人に見習うようにそれぞれの教室へと入っていった。

ついでに、この後、美琴と双葉の手によって1つの派閥が壊滅したことを、ここに記しておこう。

第二話 夜中のたわいのない事件——お兄ちゃんって優しいんだなあ！。（後書

どうでもいいですけどタイトルの「——」のあとはキャラの台詞です。

第3話 スーパーの帰り道——やっぱりこいつシスコンじゃねえの？（前書き）

これもまた続き更新しますので、ちよくちよく見に来ていただければ嬉しいです！

第3話 スーパーの帰り道——やっぱりこいつシスコンじゃねえの？

双葉はうめぬ、と唸っていた。

現在スーパーでお買い物中なのである。と、今日はお肉の特売だったことを思い出し、買いに来たのだが——

「うーん、こっちのお肉とこっちのお肉じゃ何が違うのかなあ……？」

左右に握られた肉の袋を交互に見て、双葉は首を傾げた。

右は百グラム180円。左は百グラム120円。補助金をかなり貰って割とブルジョワな双葉にとっては驚きの金額である。でもまあこれも社会勉強になるかなーと思って買いに来たのだが。分からない。同じ肉なのになぜ60円も違うのだろう？

双葉が数分も悩んでいることに気づいたのか、親切な人が声をかけてくれた。

「ああ、右の肉は身の部分が多くて左は油が多いんだ。だからこんなに値段が違うんだとき。だから買うなら右の方がいいと思うぜ」「ふわっ！？あ、有難うございます！」

双葉は左を棚に返しぺこぺこ頭を下げた。その人はいいつていって、と笑う。

どうやら優しいそうな人だ、と双葉は思い、自己紹介をすることにした。

「あの、私小鳥遊双葉っています。常盤台の生徒なんで常盤台に用があるときはいつでも言ってください」

「常盤台？常盤台っつーとビリビリの……」その人が言った言葉に双葉は首を傾げた。

「ビリビリ、ですか……？」

こっちの事情、と慌てたように男の人は言い、

「俺は上条当麻っていうんだ」

「当麻さんですか。成程です」

その当麻さんは「……ううー、俺の知り合いにこんな常識人ができるなんて……」となにやら感動していた。

双葉はさらにこの当麻さんの設定を付け加える。なんか変な人だと。

レットエル

そんな設定を貼られていることに露ほど気づかず、当麻と名乗る男はその後双葉に”上手な買い物の仕方”を教えてくれた。

普段あまり何も気にせず買い物をしている双葉にとって全てが驚きである。

「当麻さんって凄いですね。私、知らないこといっぱい勉強になりました」

「はは、あんまり金ねえからなー、レベル0って」

「レベル0……ですか」

双葉は驚いたように声を挙げた。

当麻ははは、ともう一度笑う。

「ま、能力は個人の才能だしなー、しょうがねえよ」

「吃驚です……レベル0ってスキルアウト作っていつつ能力者を襲うか暗い目をしているだけかと思っていたので……こんな優しい人がいるとは驚きです」

「……能力者って本当にスキルアウトに絡まれやすいんだな……」

会計を済ませると——その金額はいつもの5分の1だった——途中まででは一緒だということが分かり一緒に帰ることになった。
と、その時。

「……オイ、なんか帰りが遅いと思ったら…… テメエ、彼氏でもいたのかよ」

「あ、お兄ちゃん！」

コンビニに行ってコーヒーを買ってきた帰りだったのだろう。一方通行がコーヒーの入った袋をぶら下げながら双葉の方へ来た。双葉も嬉しそうに駆け寄る。もちろん、当麻を引き連れて。

「あのね！この人双葉のお買い物沢山付き合ってくれたの！なんといつもの」そこで双葉は手の形をパーに、つまり5本突き立てた。

「5分の1の金額で収まったんだよ」

「……ヘエ……そりゃアよかったことで
「うんっ！」

ついでに、この義理兄妹が和やかに（？）話している横で、当麻は（何この人——？白眼赤目って……明らかに堅気じゃないんですけど——！？）

と内心ビクビクしているのに双葉は気づかない。サイコメトラー読心能力は特に発動優先順位が高くないからだ。

「え、えと俺もう帰っていいでせう？」

「……おいテメエ、一つだけ言っておく」

「ははっははははい！？な、何ですか！？」

一方通行に睨まれて、当麻は震え上がった。
が、次の瞬間口に出たのは意外な言葉だった。

「……俺の義理妹に手を出したらぶっ殺す」

その瞬間、当麻はポカンと口を開けて——それから言った。

「……………シスコン？」

その瞬間、一方通行はベクトルを最大限にして当麻に拳を叩き込んだ。——が、何故かそいつは吹っ飛ぶこともひしゃげることもなくそれを”右手”で受け止めた。

「……アアン？」と一方通行は怪訝そうに。

「うわっあつぶねー」と当麻は心臓をバクバクさせながら。

「おー、お兄ちゃん的能力が防がれたんだよー」双葉はいつもどおりほけーとしながら言った。

これが、学園都市の最強と最弱が出会った日だった。

第3話 スーパーの帰り道——やっぱりこいつシスコンじゃねえの？（後書き）

…… ちょっとお遊びでシスコン度増させただけなんだ。 本気で悪戯
心だったんだ。

許してください——方通行様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162y/>

とある科学の能力記憶

2011年11月26日22時47分発行